総合文化研究所ワークショップ

二十世紀初頭におけるコプト・キリスト教徒の文化ナショナリズム

報告　三代川寛子

本発表では、エジプトの宗教的マイノリティであるコプト・キリスト教徒（以下コプト）の文化ナショナリズム運動を紹介した。

コプトとは、元来はエジプトを意味するギリシア語のアイギュプトスという語がアラビア語に入って転訛したものと考えられており、現在ではエジプトに根差したキリスト教徒を指す語として使用されている。エジプトにおけるキリスト教の歴史は長く、一世紀の聖マルコによるアレクサンドリア宣教に端を発するとされる。その後、七世紀のアラブ軍によるエジプト征服とそれに続くエジプトのイスラーム化以降もキリスト教の信仰を保ってきたのが現在のコプトの人びとである。

大多数のコプトが属するコプト正教会では、典礼暦としてコプト暦が、典礼語としてコプト語が使用されるが、十九世紀以降のエジプト学の進展により、いずれも古代エジプトの暦および言語と関連が深いものであることが明らかになった。また、十九世紀末ごろからエジプトのナショナリズム運動が高揚する中、それに呼応する形でコプトの知識人、特に俗人信徒の間で、コプトという宗教集団の「エジプト人らしさ」が議論されるようになった。そこで本発表では、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて発行された定期刊行物 *Misr* および *Ayn Shams* を主要な資料として、コプトの俗人信徒らによって推進されたコプト暦元日祭（ナイルーズ祭）復興運動とコプト語復興運動を取り上げた。

コプト暦もコプト語も、コプト正教会に伝わる宗教文化であるが、当時の俗人信徒知識人らはこれらが古代文明に起源を持つことを根拠として、ムスリムとも共有されるべきエジプト民族の暦・新年祭、そして言語として提示した。このことから、当時コプトの俗人信徒知識人の間に、コプト・キリスト教徒でありつつ同時にエジプト民族でもあるという自己認識が構築されていたことが明らかになった。

これまで、エジプトのナショナリズムは、リベラリズムに基づき宗教・民族的帰属を敢えて無視し、祖国への忠誠を紐帯として「エジプト国民」を創出してコプトの国民統合を果たしたと考えられていたが、コプトの側からの民族主義も存在したことが明らかになった。また、古代文明を用いたエジプト・ナショナリズムはファラオ主義と呼ばれ、特にコプトによるファラオ主義は「コプトのみが古代エジプト人の優秀な血を受け継いでいる」というような人種主義や特殊主義と結びついた主張であると考えられてきたが、少なくとも一九二〇年代までのコプトの知識人たちの主張内容にはそうした傾向が見られないことが明らかになった。

発表日　二〇一八年五月二日（水）

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja